

◆ 今週のコメント

第17週及び第18週は、ともに大型連休を挟む週で、例年、この時期は全般的に報告数の減少する傾向がみられます。

- ・ インフルエンザの第17週の定点当たり報告数は4.55(305例)、第18週の定点当たり報告数は2.01(135例)で、2週続けて減少していますが、ともに過去5年平均値を大きく上回る状態が続いています。行政区別では、下京区で、第17週から第18週にかけ、報告数が増加しています。
- ・ 伝染性紅斑の第17週の定点当たり報告数は0.53(21例)、第18週の定点当たり報告数は0.30(12例)で、平成22年第33週(8月16日～22日)以降、過去5年平均値を上回る状態が続いています。
- ・ クロイツフェルト・ヤコブ病の報告が1例あり、本年度初めての報告です(第18週)。平成22年の累積報告数は3例です。
- ・ バンコマイシン耐性腸球菌感染症の報告が1例あり、本年度初めての報告です(第18週)。平成22年の報告はありません。

◆ 今週のトピックス: <腸管出血性大腸菌感染症>

肉の生食を原因とした、腸管出血性大腸菌への感染が問題となっています。本年、本市では、第18週までに4例、速報として、第20週に1例、計5例の報告があります。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類:結核 8例(肺結核 6例, 肺外結核 1例, 潜在性結核感染者 1例)、(喀痰塗抹陽性 3例)
【1月以降の累積報告数 125例(肺結核 63例, 肺外結核 28例, 潜在性結核感染者 34例)、(喀痰塗抹陽性 38例)】
- ・ 五類:劇症型溶血性レンサ球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 1例】(第15週追加報告分)
- ・ 五類:クロイツフェルト・ヤコブ病(古典型) 1例【1月以降の累積報告数 1例】
- ・ 五類:バンコマイシン耐性腸球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 1例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

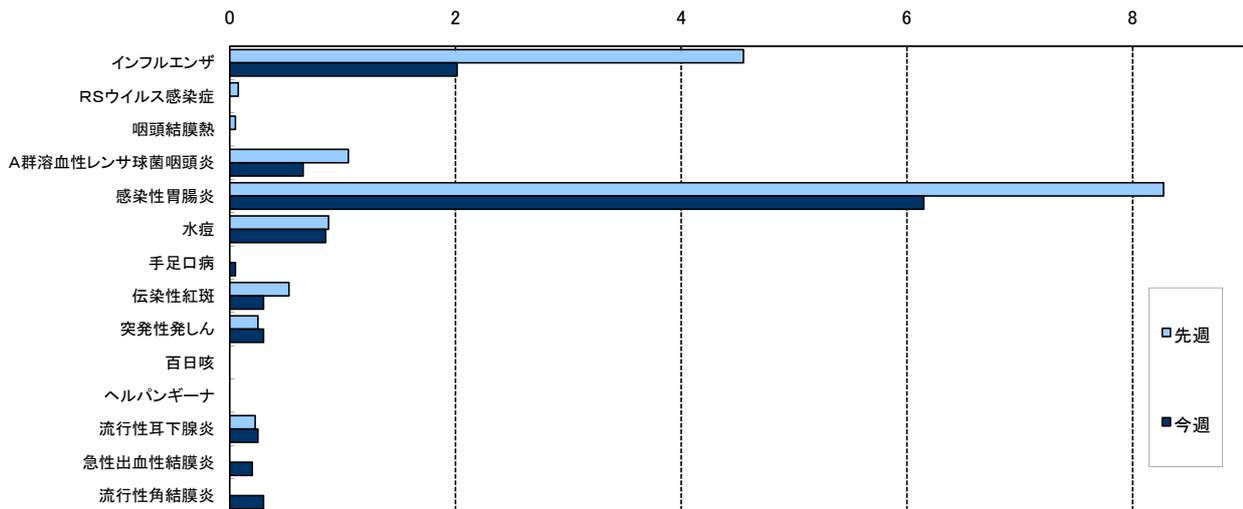
定点	感染症名	第18週		第17週	
		定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	2.01	135	4.55	305
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	6.15	246	8.28	331
	② 水痘	0.85	34	0.88	35
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.65	26	1.05	42
	④ 伝染性紅斑	0.30	12	0.53	21
	④ 突発性発しん	0.30	12	0.25	10
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3	0.00	0

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <腸管出血性大腸菌感染症>

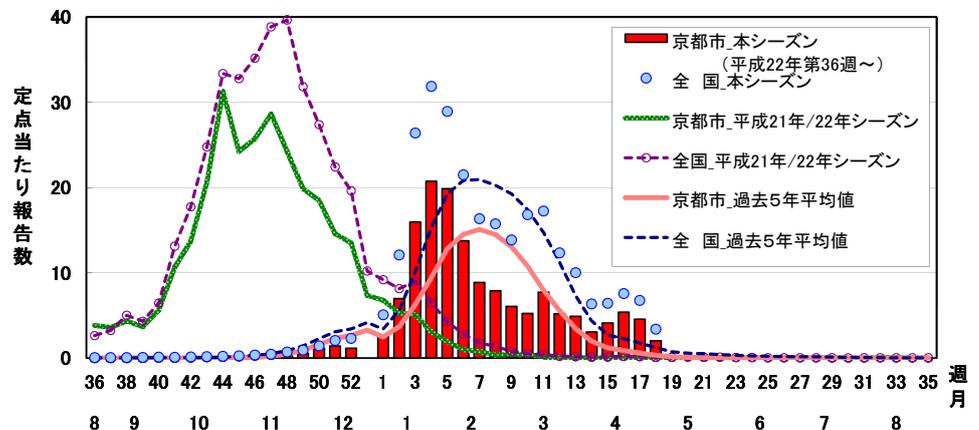
(注) 京都市のデータは、平成23年5月11日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ



2 インフルエンザの推移

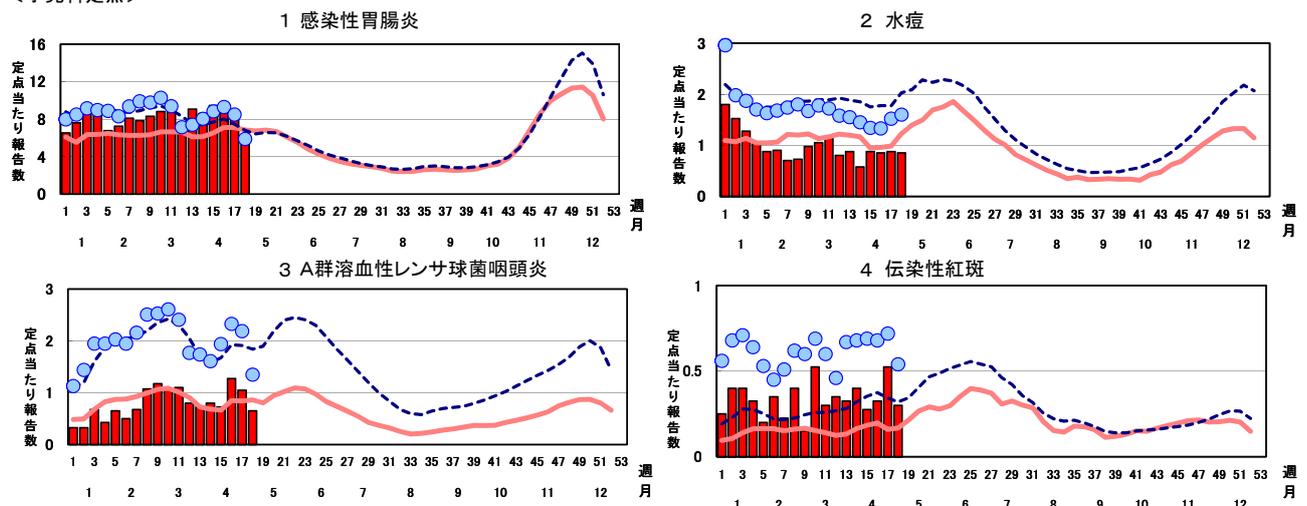
週	報告数(例)
第14週	205
第15週	275
第16週	360
第17週	305
第18週	135
累積報告数 (第36週以降)	10,087



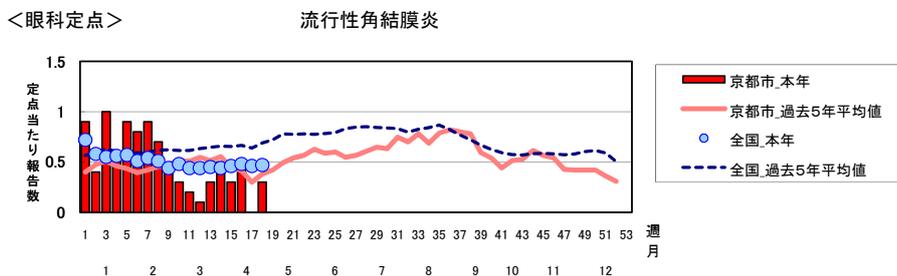
※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

3 主な感染症の定ポイントあたり報告数の推移

<小児科定ポイント>



<眼科定ポイント>



今週のトピックス：＜腸管出血性大腸菌感染症＞

肉の生食を原因とした、腸管出血性大腸菌への感染が問題となっています。

本年、本市では、第18週までに4例の報告があります(第8週及び第9週。型はすべてO157)。

この4例は同じひとつのグループで、飲食店で4名中3名が生レバーを喫食しており、原因は経口及び接触感染によるものと推定されています。

また、速報として、平成23年5月16日(第20週)には、今年度初めてとなる腸管出血性大腸菌感染症患者(O157)の届出が1例ありました。

平成11年4月以降、本市では、型別ではO157の報告が最も多く、次いでO26、O111の順となっています。

平成22年第1週以降の本市及び全国の推移では、報告は5月から9月にかけての夏季に特に多くなっています。

なお、腸管出血性大腸菌感染症報告後にHUS(溶血性尿毒症症候群)の発症が認められた場合には、追加報告が求められていますので、医療機関の方々には、よろしくお願いたします。

京都市保健福祉局保健医療課及び京都市衛生環境研究所では、特に腸管出血性大腸菌に感染すると症状の重くなりやすい乳幼児に対する、予防啓発を目的とした「京都市こどもの感染症 平成23年5月臨時号」を発行しています。

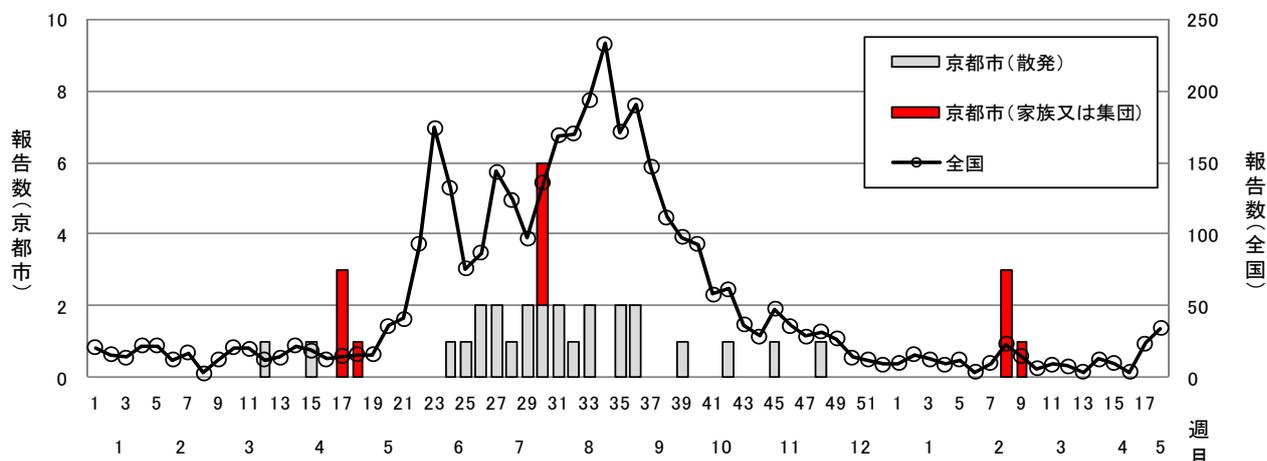
ホームページでは、バックナンバーもご覧いただくことができますので、プリントアウトし、掲示ポスターや配布チラシとして、御利用ください。

→ 京都市衛生環境研究所ホームページ <http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000007130.html>

本市における診断年別 型別報告数

診断年	合計	O26	O91	O103	O111	O121	O145	O157	その他
平成11年4月以降	26							25	O1が1例
平成12年	33	8						25	
平成13年	52	8			1			43	
平成14年	35			1				32	O165、O型別不明が各1例
平成15年	101	5						96	
平成16年	48	2				4		42	
平成17年	36	5	1					30	
平成18年	57	2				1		54	
平成19年	54	2			3			49	
平成20年	86	34		5	2		3	41	HUS患者のため型別不明が1例
平成21年	93	8	1		3	1	1	79	
平成22年	34	1		1	2			30	
平成23年第20週まで	5							5	

本市及び全国の推移 (平成22年～平成23年第18週)



* 京都市では、第20週に1例の報告あり